

## 佐賀県のA群溶血性レンサ球菌について (平成23年度)

細菌課 甘利祐実子 小松京子 成瀬佳菜子 西桂子  
諸石早苗 吉原琢哉 眞子純孝

キーワード：A群溶血性レンサ球菌 感染症発生動向調査事業 病原体検査 菌数収集事業  
T型別検査 希少感染症技術向上事業 溶血性レンサ球菌レファレンス事業

### 1 はじめに

佐賀県における平成23年度のA群溶血性レンサ球菌感染者の発生状況と、T型別検査の結果について報告する。

また、平成3年4月から結核・感染症サーベイランス事業および希少感染症技術向上事業の溶血性レンサ球菌レファレンス事業の一環として九州3県(大分、沖縄、佐賀)の共同調査に参加し、菌株を大分県に送付している。その情報還元として、年1回九州および全国の発生状況の集計が報告されている。

### 2 方法

感染症発生動向調査事業の一環として病原体検査、感染症情報センターの機能強化の一環として菌株収集事業を実施している。

病原体検査については小児科2医療機関を病原体定点に指定しA群溶血性レンサ球菌咽頭炎が疑われる検体を、菌株収集事業については10医療機関で分離されたA群溶血性レンサ球菌菌株を収集している。

収集された菌株について、デンカ生検型別免疫血清を用いた凝集法によるT型別検査を実施した。

#### 菌株収集対象医療機関

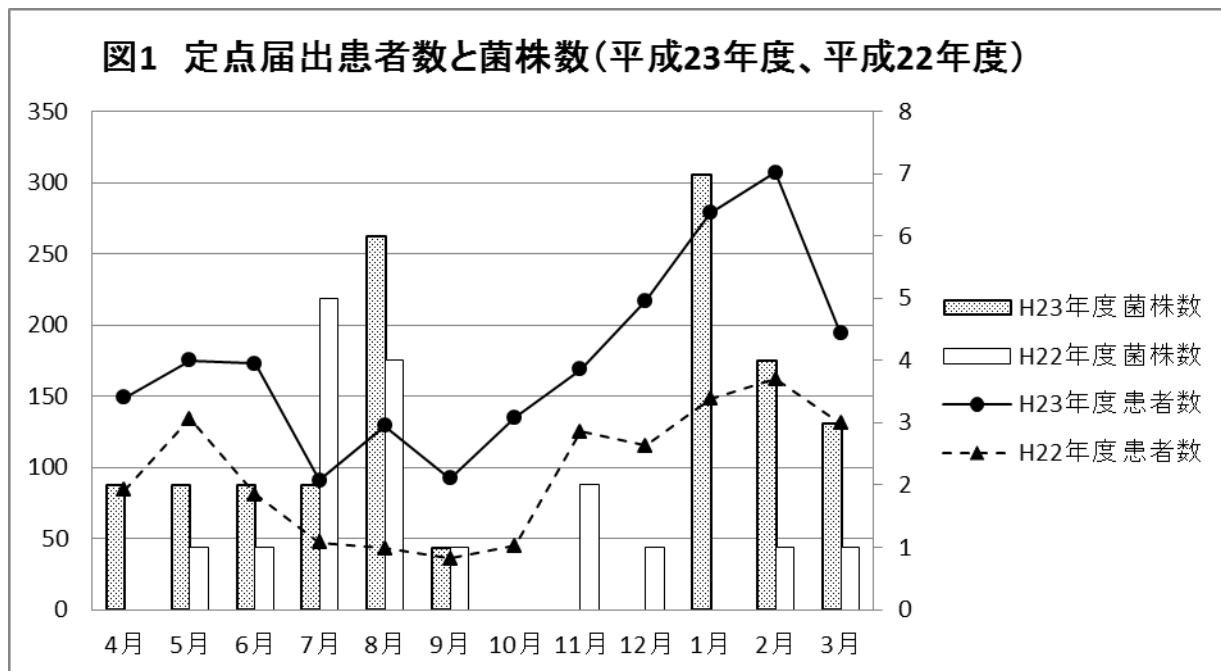
佐賀大学医学部附属病院  
独立行政法人国立病院機構佐賀病院  
佐賀社会保険病院  
地方独立行政法人佐賀県立病院好生館  
日本赤十字社唐津赤十字病院  
独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター  
独立行政法人国立病院機構東佐賀病院  
伊万里市民病院(平成24年2月まで)  
伊万里有田共立病院(平成24年3月から)  
唐津東松浦医師会医療センター  
佐賀県医師会成人病予防センター

3 受付菌株及び検体数

受付菌株数 29 件であった (表 1)、そのうち劇症型溶血性レンサ球菌感染症の検体が 1 件あった。感染症発生動向調査の定点届出患者数及び菌株数ともに平成 22 年度と比較して増加が認められた。また平成 23 年度は、届出患者数が増加する冬期に菌株数が増加する傾向が認められた (図 1)。

表 1 受付数

受付月	菌			株	
	(独)国立病 佐賀病院	(独)国立病 東佐賀病院	(独)県立病 好生館	唐津赤十字	病闘
H 2 3 . 4		2			2
H 2 3 . 5		1	1		2
H 2 3 . 6				2	2
H 2 3 . 7		2			2
H 2 3 . 8		3	3		6
H 2 3 . 9			1		1
H 2 3 . 1 0					
H 2 3 . 1 1					
H 2 3 . 1 2					
H 2 4 . 1		2	5		7
H 2 4 . 2			2	2	4
H 2 4 . 3	1		2		3
計	1	10	14	4	29



4 結果

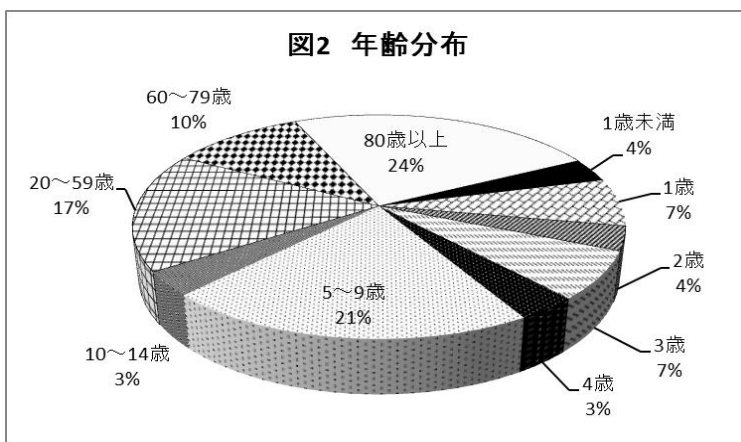
(1) A群溶血性レンサ球菌感染者の年齢、検査材料別割合

ア A群溶血性レンサ球菌感染者の年齢別割合 (表2、図2)

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の患者は学童期の小児に最も多いが、発生動向調査により収集された検体は20歳以上が全体の52%を占めた。

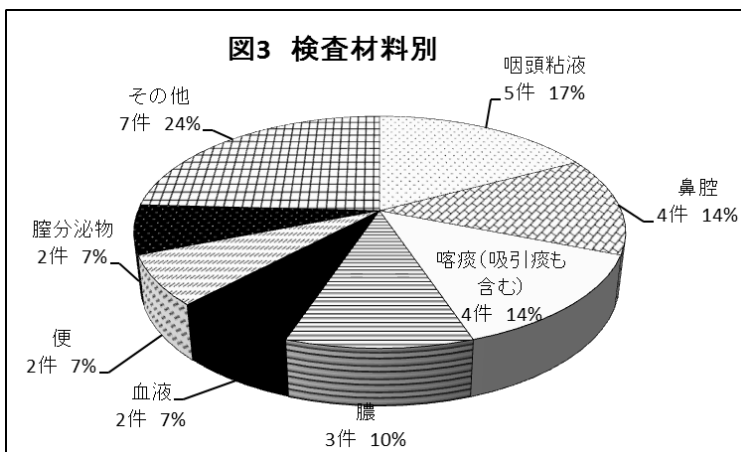
表2 年齢別検体数

医療機関	1歳未満	1歳	2歳	3歳	4歳	5～9歳	10～14歳	20～59歳	60～79歳	80歳以上	総計
(独)国立病院機構 佐賀病院								1			1
(独)国立病院機構 東佐賀病院			1	1		6	1			1	10
(独)県立病院好生館	1	2		1	1			2	2	5	14
唐津赤十字病院								2	1	1	4
計	1	2	1	2	1	6	1	5	3	7	29



イ A群溶血性レンサ球菌分離菌株の検査材料別割合

検査材料別では、咽頭粘液が17%を占め、次いで、鼻腔14%、喀痰(吸引痰含む)14%であった(図3)。

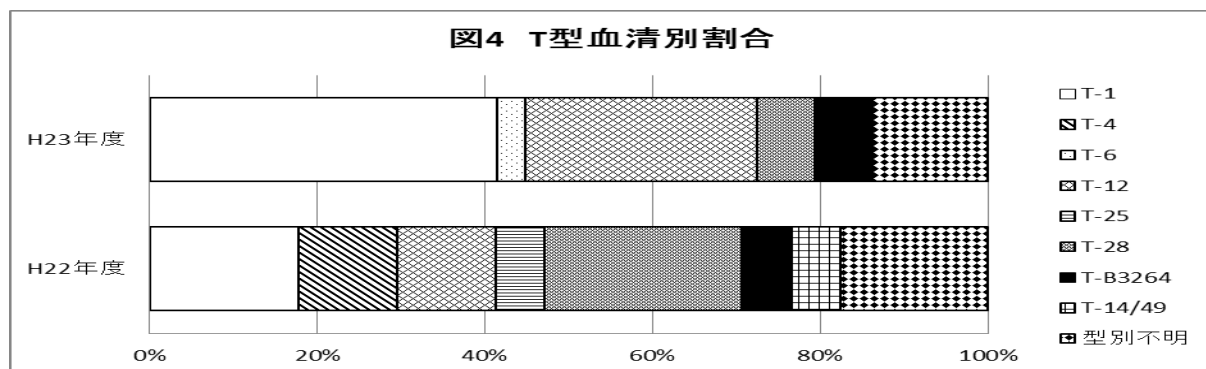


## (2) A群溶血性レンサ球菌のT型別分類

T型別では、1型 12株 (41.4%)、12型 8株 (27.6%)、28型、T-B3264がそれぞれ2株 (6.9%) 分離された (表3)。

表3 月別T型別数

	T-1	T-12	T-28	T-6	T-B3264	型別不明	総計
H23.4	1					1	2
H23.5	1	1					2
H23.6	1					1	2
H23.7	1	1					2
H23.8	4	1				1	6
H23.9			1				1
H24.1	3	2			1	1	7
H24.2	1	1	1		1		4
H24.3		2		1			3
総計	12	8	2	1	2	4	29
割合	41.4%	27.6%	6.9%	3.4%	6.9%	13.8%	



\*T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられる。

## 5 考察

平成23年度の佐賀県におけるA群溶血性レンサ球菌咽頭炎患者報告数は2,180名、検体受付数は29件であった。報告数、検体受付数ともに前年度と比較し増加した。

平成23年度に検出されたT型は、1型、6型、12型、28型、B-3264型であった。前年度と比較して1型の検出率が高くなった。なお、4型および25型は検出されなかった。(図4)

溶血性レンサ球菌レファレンス事業報告の全国の集計では平成23年は1型、4型、12型が多く検出されており、特に1型の検出率が高くなっている<sup>1)</sup>。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の患者の年齢のピークは学童期の小児であるが、今回収集された菌株の患者年齢は20歳以上が52%を占めた。これは病原体定点である小児科2医療機関からの検体収集ができなかったことが一因と推測される。

溶血性レンサ球菌の全体像の把握のためにも、今後医療機関との連携が重要であると考え。

1) 病原微生物検出情報 I A S R Vol. 33 No 8 溶血性レンサ球菌感染症より